

島田正治

京都文化博物館での個展の作品搬入まであと十日ほどである。ほぼ準備はおえたつもりだが、まだ細々とした仕事が残る。それを少しずつこなしている。一週間ほど前、たのんでおいた掛け軸が五点届いた。これはわたしのいとこの林公子さんの作。現在兵庫県八鹿町在住で、この十年来表装の技術を身につけて、かねて墨画の作品をやってみたいの希望もあり、こちらも願ってもないこと故、そうすることにした。わたしの絵はいわゆる伝統的な水墨画の花鳥風月でない。むしろ型破りの墨画だから表装でどう作品を生かすことができるか、なかなか難しいところだ。新しい挑戦でもある。それを快くうけてくれた。

最近日本の各地で表装展なるものの展覧会が開かれているのを新聞で見たりするが、かなり形式にとらわれず自由にデザイン化されてきているようである。しかし、表装はあくまでも裏方の仕事で、絵なり書の作品がより美しく見えるようでないといけない。表装ばかりが目立つのはこれはよくない。本末転倒である。

昔は書画を飾るべくスペースがあった。床の間がそのひとつだろう。ここには軸物がかけられた。欄間には横物扁額。雲板には色紙など。しかし、現在の建築物からは床の間がどこかへいってしまった。和室が少なくなった。それに代わるものとして、いわゆる洋間、和室を兼ねたりリビングの出現。むしろこういう場所に作品が掲げられる。和洋折衷型といえよう。表装はだれにでもよいというわけにはいかない。よく作品を理解してもらって、そこから最高のものが生まれることになる。

さて京都展の出品作は総数百点ほど、会場が大きいので、ちょっとした回顧展になろう。以前に描いた横長大作数点、これらは展覧会場で仮枠に仕立ててもらおう。あとパネル写真も展示、ポスターなども。これで三十年来の仕事を振り返ることもできる。ひとつの歴史にもなる。根気よく描いてきた。途中で止めなかった。一朝一夕にはできぬものだ。まだ終着点ではない。ひとり道のひとり制作、こんな愉快なものはない。人がなんといおうと自分の道を歩む。また、これしかない。自分が楽しければよいのである。よく言われる仕事に停年、定年はない。死に遭遇した折りがすべてピリオド、終止符を打つ。六十、七十歳、まだまだあの世からのお迎えは早すぎる。八十歳になっても同じだ。やりたいことやらねばならぬこといっぱいある。しかし所詮、のんびりやろうよ。

メキシコへ再び戻るのを六月十四日と決めた。日本の四月、五月の気候のよさ、またその美しさ、この二十年来、久しく味わうことのできなかつたものだ。つくづく日本もいいところだなと思う。メキシコの自然は概して苛酷である。荒っぽい。放胆である。日本もメキシコも両方よい。好きだ。愛している。だからこそ、ここからわたしの芸術も生まれる。双方の理解あってのことだろう。理屈ではわからぬ。やはりメキシコに住んでみての体験、実感があってこそと思う。